



分子研を去るにあたり



分子研の良き時代

北川 禎三

豊田理化学研究所 フェロー

(前 岡崎統合バイオサイエンスセンター生命環境研究領域 教授)

きたがわ・ていぞう/昭和44年阪大・理(無機・物理化学専攻)で理博を得る。41年に阪大蛋白研助手、55年阪大医助教授、58年に分子研教授、平成12年に統合バイオサイエンスセンター教授。学位論文はポリエチレン結晶の物性と振動分光で、中性子スペクトルを日本で初めて取り扱った。その後ヘム蛋白質の赤外分光、共鳴ラマン散乱、時間分解共鳴ラマン散乱、紫外共鳴ラマン散乱などで国際的COEとして認められた。特定領域研究の班長、領域代表、特別推進研究などを受ける。現在、日本学術会議化学委員会副委員長。



私は昭和58年に分子動力学研究部門の2代目教授に選ばれた。初代の藤山常毅教授が病気で急逝された後任だったので、部門全体が藤山先生の研究目標に向かっていった。当然、助手の空きポストはなく、私の助手を採用するためには前任助手の移動先を世話することから始めねばならなかった。そしてその人達が占有していた実験スペースを少し空けてもらって自分の装置を置かせてもらう交渉からスタートした。実験棟504号室の片隅にラマン散乱測定装置を置いた。1年半後くらいに自分の助手を採用できたが、前任の助手とも共同研究を進め、部門としての成果をあげる事を考えた。隣室には広田榮治先生が居られ、高分解能分光による分子精密構造の決定で世界の先端を走っておられたので、かなりのプレッシャーを感じた。最近の新任教官とは環境条件がかなり異なるが、それでもその時代が「分子研の良き時代」という印象で私の心に残っている。その理由を考えてみた。

当時分子研は、非常に生物アレルギーであった。それでも私には、気相分子の物理化学の詳細を論ずるより、蛋白質が何故うまく機能するかに関する1桁目の構造化学に興味があった。それで、「機能性高分子の構造化学」というテーマで特別研究を申請し、研究費を

受けた。現在では「機能性高分子」という言葉が別な概念をもつので、私は「うそではないが少しごまかす」方策をとったことになる。というのは、頭のにぶい私が精鋭そろいの分子研で、傍目対等に研究を進めている印象を外に与えるためには、その精鋭達とは別なセンスで「泥くさいがユニークな展開」をしようと考え、蛋白質を主テーマにした。

そういう逃げ腰の非力な私を育てて下さったのが、井口洋夫所長や主幹の先生方で、真のリーダーシップを発揮されていた。所長自ら大きなプロジェクトを文部省に提案し、日本の主な分子科学者をそこに集め、その中に分子研の若手教官を少し加えられた。無名の私にとってそこでの研究交流は、単に分子科学のリーダーと知り合いになるだけでなく、プロジェクトの進め方や分子科学という分野の学問的位置づけ等、簡単には語れない多くの事を学びとった。研究所所長の理想的なありようを見た感じであった。

その時代に学んだ事は、その後私が特定領域研究の班長や領域代表を務めたり、多くの科研費をいただけた基礎になっている。分子研就任前、自分一人で小さい穴蔵で実験していた時代が14年もあり、「万年助手を覚悟してくれ」と家族に頼み込んでいただけ

に、分子研着任後の一見みじめな研究環境でも、しあわせに思えた。そういう出発であったが、分子研の実験棟から山手に引越す時点では、実験棟502、504～509、204、205号室を使っていたので、研究グループは非常に成長した事になる。それが実現した背景には、「部屋を無駄に多く占有すべきではないが、研究が発展して人数、装置が多くなり、実動面積として必要なら使わせてやろう」という寛大さが、当時の所長に強かった事がある。これは研究所の大切なflexibilityで、全員が最初から同じ面積を持つべきだという悪平等の考えとは異なる。

このような自分の研究の進展の一方で、研究所独自の大学院を持ちたいという動きが総研大の創設につながった。長倉三郎先生のすごいリーダーシップを目の前面に見た。幸いにも私は、その理想的形態の討論から実際の規則づくり、光科学専攻づくり等に直接関与する事ができた。2006年9月の学位授与式では、小平学長から総研大全体を通して学位授与者の数が最も多いと誉めいただいた。その中には井上奨励賞受賞者3人、長倉賞1人、森野奨励賞2人が含まれ、既に教授2人、助教授1人が誕生した。強調したい事は、分子研に「creativeな活動を尊ぶ精神が強かった」事であり、それが今後も大切であると思う。

上に述べた基本精神とか思考法の指導というものこそ所長に求められている最も大事な要素であり、所員と外界とのつながりも所長の力に負うところが大きかったと痛感する。そんな私を育ててくださった昔の所長先生方に感謝の気持ちで一杯である。また無事退官するまで男の美学に耐えてくれた家内にも感謝の意を表したい。